

第 21 回対照言語行動学研究会（JACSLA21）研究発表 概要

2023. 10. 14 開催 於 東京工業大学

タイトル	漢語副詞の感動詞的用法への拡張：漢語「是非」を一例に
著者名（所属）	東泉裕子（東洋大学）・高橋圭子（東洋大学）
連絡先 E メール	Higashiizumi.yuko.1[ア]gmail.com / ktakahashi[ア]toyo.jp
発表内容	<p>本発表の目的は、近現代語における漢語副詞「是非」の用法を調査し、名詞から副詞へ、さらに感動詞的用法へという日本語における漢語の用法拡張の一面を示すことである。</p> <p>先行研究によれば、漢語「是非」は、中古までは「是」と「非」という文字通りの意味の名詞用法が中心であったが、中世には「是非(に)」という副詞用法が出現し、近世には「是非(に)」「是非とも(に)」の意志・希望や依頼・懇願の表現での使用が増加、「是非」の疊語化も発生した(玉村 1991、2018)。副詞用法は、日本で発生したもので中国語にはなく(方 2009)、現代語では「是非」の中心的な用法となっている(玉村 1993)。さらに、感動詞的用法も観察される(東泉・高橋 2023)。しかし、近現代語のコーパスに基づく研究はまだ見当たらない。そこで、感動詞的用法も観察される、近現代語の書き言葉のコーパスの会話部分と話し言葉のコーパスの会話を利用して「是非」の用例調査を行った。</p> <p>その結果、近現代語では「に」を伴わない「是非」の形式の副詞用法が最も使用比率が高いこと、副詞用法の中には呼応する述語が見当たらないものもあること、現代語の会話では「是非」単独や「是非是非(是非)」という疊語形式による感動詞的用法への拡張も見られることがわかった。漢語については、名詞から副詞へという史的変遷の研究がある(前田 1983、趙 2013、鳴海 2015 など)。本発表では漢語「是非」の語史をとおして、さらに感動詞的用法へという一面も見えてくることを指摘した。</p> <p>質疑応答においては、感動詞的用法への分類の基準と「感動詞」の定義を明確にする必要があるという指摘を受けた。今後、先行研究における「感動詞」の定義を洗い出し、感動詞的用法の機能を精査したい。</p> <p><b>参考文献</b></p> <p>玉村禎郎(1991)『「是非」の語史：副詞用法の発生まで』『語文』56, pp. 20–38. 大阪大学国語国文学会／玉村禎郎(1993)『「是非」』『日本語学』12(7), pp. 66–72. 明治書院／玉村禎郎(2018)「近世における「是非(に)／とも／ともに」—副詞用法を中心に—」近代語学会編『近代語研究』第20集, pp. 61–74. 武蔵野書院／趙英姪(2013)「近現代の漢語副詞の成立」野村雅昭(編)『現代日本漢語の探究』pp. 214–233. 東京堂出版／鳴海伸一(2015)『日本語における漢語の変容の研究：副詞化を中心として』ひつじ書房／東泉裕子・高橋圭子(2023)「近現代語における漢語『是非』」言語資源ワークショップ 2023. ポスター発表／方香蘭(2009)「漢語副詞『是非』の成立について」広島女学院大学大学院言語文化研究科編『広島女学院大学大学院言語文化論叢』12号, pp. 102–79 (119–142)／前田富禎(1983)「漢語副詞の変遷」国語語彙史研究会(編)『国語語彙史の研究 四』pp. 189–231. 和泉書院</p>